

メルマガ「篠研の“日々成長する教師”」登録特典

# 精読指導の秘奥義

篠崎大司

## 0. はじめに

本コンテンツは、日本語教師のための無料メルマガ「篠研の“日々成長する教師”」で連載された「精読指導の秘奥義」（全8回シリーズ）をまとめたものです。

日本語の先生方の中には、「精読指導が苦手。」という方が少なくありません。確かに、精読指導は初級の文型指導に比べて指導方法が確立されておらず、また、教師向けの指導参考書もほとんどないというのが現状です。つまり、すべて教師の技量に委ねられているわけです。ですので、特に経験の浅い日本語教師の方にとっては、ハードルの高い指導分野ということができるでしょう。

しかしながら、教師歴 20 年を経た私からすれば、精読指導ほど面白い授業はありません。なぜなら、精読指導は単に表面的な言語活動にとどまらず、学習者の内面に深く関わる指導だからです。

学習者は、精読活動を通じて、気づき、驚き、共感、発見、感動を伴いながら、自分の中になかった新たな価値観や世界観に触れ、内的変容を起こします。

私たち教師は、そうした学習者の内的変容を、精読指導を通じて目の当たりにすることができます。それは、教師にとってもかけがえのない感動体験です。

ぜひ、本コンテンツで精読指導のコツを身につけていただき、得意分野の1つに加えていただきたいと思います。

2016年11月5日  
篠崎大司

## 1. 精読指導ほど、面白いものはない！

篠研の会員様から、

「中級以上の精読授業のやりかたがわからない。」

「実習でもやったことがないし、精読授業の解説書もないので、まったく授業のイメージが湧かない。」

というご相談をよく受けます。

その結果、文章に出てくる言葉や文型の意味を確認し、文章の一部をそのまま疑問文にしたような問いを学習者に投げかけて、それであたかも内容を理解させているかのような表面的な授業に終始してしまうと。

でも、そんな授業、やってて面白いですか！

本当の精読授業というのは、究極的には、文章を学習者とともに熟読玩味し、1文1文彼らと対話をしながら、文章の裏の裏まで徹底的に深掘りし、学習者の世界観や価値観に揺さぶりをかけ、あるいはいい意味で破壊し、そこへもってきて、学習者の思想・信条・想像・価値観・世界観をはるかに超える「マツコの知らない世界」(笑)ならぬ「あなたの知らない世界」を提供することで、

「なるほど！ そういうことだったのか！！！」

と、認知的ビッグバンを体現させるところにその神髄があるのです。

この認知的ビッグバンを一度経験したならば、教師も学習者も、もうこの精読活動の虜。むちゃくちゃおもしろいです。

そりゃそうです。

学習者は、認知的に一気に自由に解き放たれ、教師は、その最初の目撃者になるわけですから。

ところが、市井の参考書や専門書には、そんなことを書いているのは1つもない。

実際、読解授業の指南書を読んでも、まず上がってくるのが、スキミング的な読み（大意読み）とスキニング的な読み（探し読み）。

このスキルを否定するつもりはありません。手早く情報収集をするには必要なスキルです。

ただし、読みとしてはかなり浅いもの。

必要な情報を収集できれば、そこで終わり。

それによって、学習者に劇的な内的変化が起こるわけではありません。（少なくとも、そういうことを期待した読みではない。）

それから、次にあるのが、段落構成とか論の展開とか、意見文と事実文の区別とか。

これも否定するつもりはありません。精読の過程では必要な視点ですから。

でも、精読の神髄はもっともっと深いところにあるのです。

海岸端でパチャパチャやるような読解活動で終わってしまうのは本当にもったいない。

もう1回言いますが、>>本当にもったいないです！！<<

というわけで、これから数回にわたって「篠崎的精読授業の秘奥義」を伝授したいと思います。

完全保存版ですよ、これ！

## 2. 精読前に必要な下準備

精読の神髄は、素材となる文章を学習者といっしょに1文1文熟読玩味し、深く深く徹底的に深く読み込んでいくことにあります。

深く深く徹底的に深く読み込んでいくと、文章の持つ価値観・世界観と学習者の持つ価値観・世界観が「カッキーーン!!!」とぶち当たるところに行きつく。

その時に、学習者の内面に起こるのがだいたい「深いレベルの共感」あるいは「価値観・世界観の対立からの破壊と再生」なわけです。

いずれにしても、これを通じて学習者は、「なるほど! そうだったのか!!!」自らの内面に起こる認知的ビッグバンを経験すると。

これこそが「読み」の醍醐味なんですね。

しかしながら、いきなり深い読みができるわけではありません。

何事にも段取りというものがあり、下準備というものがあります。

ただ、超ベテランになると指導方法も異次元レベルで、私がプロの日本語教師になって最初に勤めた日本語学校の上司は、学習者から「日能試1級合格の神様」とあがめられていた方でしたが、その方の精読授業というのが圧巻でした。

事前の新出語彙・表現・文型の導入一切なし。先行オーガナイザー一切なし。

いきなり文章を読み始め、文章を読みながら語彙・表現・文型の意味を学習者に考えさせ、導入し、その導入した語彙の持つニュアンスから文章の内容に踏み込んでいき、

なぜ、ここでこの言葉を使ったのか、

なぜ、筆者はここでこの比喩を使ったのか、

なぜ、ここでは「それ」ではなく「これ」なのか。

なぜ、筆者はこんなに怒っているのか。などなど。

矢継ぎ早に学習者に問いを投げかけながら、学習者をあっという間に読解に巻き込み、彼らの知識を総動員させ、徹底的に考えさせながら、それでいて、適度なリラックスと緊張感を

維持しつつ、「じゃあ、金さんならこの時どうする?」「グエンさんはどう思う?」と、自分の問題として落とし込ませていく。

そして、学習者から、

「先生! なるほど! そういうことだったんですか!」

という声が上がリ、精読授業が終わるころには、学習者はみな晴れ晴れとした気持ちと得も言われぬ高揚感に包まれるのでした。

これを「圧巻」と言わずして何というか。

ただ、これだけのダイナミックな授業を展開するためには、どのような話題にも対応できる豊富な知識と、どのような話題にも対応できるぶれない価値観・世界観、そして、「阿吽の呼吸」ともいうべき学習者とコミュニケーション能力など、桁違いなスキルが必要です。

もちろん、そのレベルを目指して日々修練していくわけですが、残念ながら、今の私はまだまだとてもできません。

では、どうするか。

当たり前ではありますが、教師も学習者も精読活動に注力できるように、精読活動の前に以下の下準備はすましておくといいでしょう。

料理で言えば、下ごしらえですね。

1. 新出語彙・表現・文型の導入
2. 文章の内容の大まかな確認
3. 先行オーガナイザー

1をしっかりとっておくと、精読のときにはそれを手掛かりにして、比喩やレトリックなど前後の文脈から醸し出される意味の理解に注力することができます。

そして、それに2・3の事前知識が加われば比較的スムーズに深い内容理解に進むことができるでしょう。

まずは、下準備。大事です。

### 3. 精読活動の層構造を知れ

精読活動をするといっても、いきなり深い読みができるわけではありません。

学習者と密にインタラクションをとりながら、学習者の理解度を探りつつ、まずは、表面的な意味の確認から入り、するするするっと行間の意味理解に入っていく、最後は、ぐぐぐーっと文章の持つ世界観、価値観へのめりこんでいく。

そうやって、ある程度の手順を追って進める必要があります。

そうしないと、学習者が置いてきぼりを食ってしまうからです。

従って、教師のほうもどういう手順で精読活動をすればいいのか、その層構造の全体像を踏まえたうえで授業を組み立てる必要があります。

では、その指導手順というべき精読活動の層構造とは何か。

それが、以下です。

1. 語彙・表現・文型の文脈上の意味の理解。
2. 文構造とその意味の理解。
3. レトリックの意味の理解。
4. 段落単位の内容の理解。
5. 背景知識・言語化されていない部分の理解。
6. 文章の持つ世界観・価値観の理解。
7. 学習者自身の世界観・価値観の書き換え。

おおざっぱ、こうなります。

基本的には、1から始まって順次7へと読みを深めていくと。

また、この7段階は、厳密に区別されるものではありません。

例えば、1レベルで出てくる語彙がそのまま4の理解につながることもあるでしょう。

また、実際の授業では1から7まで一直線に進むのではなく、行きつ戻りつしながら徐々に7に進んでいくといった感じです。

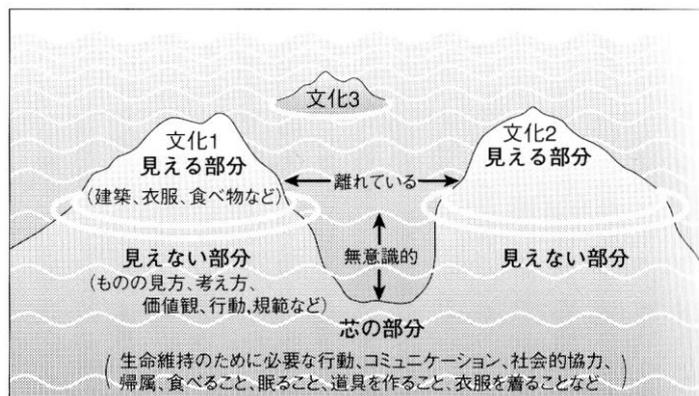
ところで、改めて先の7つのステップを見てください。

1～4までが、目に見える言葉についての理解。

5～7までが、目に見えない、言葉以外についての理解。

何か気がつきませんか？

はい、異文化コミュニケーションで定番の「文化の島」です。



文化の島

(八代京子他(1998)『異文化トレーニングボーダーレス社会を生きる』三修社 p.19)

つまり、精読活動というのは、異文化理解活動であり相互理解活動なんです。

そこまで深めないと、精読活動はつまらんのですよ。

次回から、もうちょっと具体的な活動方法について書きますね。

#### 4. 階層構造を手掛かりに文章を徹底吟味せよ

前回、精読活動の層構造についてご紹介しました。

大事なことなので、再掲しますね。

1. 語彙・表現・文型の文脈上の意味の理解。
2. 文構造とその意味の理解。
3. レトリックの意味の理解。
4. 段落単位の内容の理解。
5. 背景知識・言語化されていない部分の理解。
6. 文章の持つ世界観・価値観の理解。
7. 学習者自身の世界観・価値観の書き換え。

精読の授業では、この層構造を念頭に置きながら授業を進めていくわけです。

例えば、昨年第3版が出された

松田浩志・亀田美保『テーマ別中級から学ぶ日本語 三訂版』研究社

を例に、どのように読んでいくのか、検討してみましょう。

ちなみに、この教材、中級の読解教材の定番ですので採用している日本語学校も多いと思いますよ。

で、第1課「なぞなぞ」の第1段落は以下のような文章になっています。

=====ここから=====

子供が小学校で英語の勉強を始めた。私は、英語が話せるようになってくれるといいなと思ったり、難しく、きらいになったらこまるなど心配したりしていた。それでも、親が口を出して、子供にいやがられてはいけないと思って、「今日は何を勉強したの」と尋ねられないでいた。(p.2)

=====ここまで=====

そうだ！！

ここで私がうだうだと解説してもいいのですが、それだと、あなた様に精読指導案の産みの苦しみ（笑）と喜びを体感していただくことができません。

ですので、上の層構造を手掛かりに、この文章でどのようなことが指導項目として挙がってくるか、あるいは、授業中、学習者とどんなインタラクションが考えられるか、まず、ご自身で考えてみてください。

いや、考えるだけでなく、上の文章をノートの見開きページの左側に書写し、右側のページに、思いつく限りの指導項目を、本文の該当箇所からビビビッと線を引いて、リストアップしてみてください。

正解はありません。

あなた様の読みが、あなた様の精読授業を作り上げるのです。

そして、そうした文章の徹底吟味・探求心そのものが、精読授業に息吹を吹き込むのです。

## 5. 指導項目を徹底的に洗い出せ（前半）

前回、素材として紹介した

松田浩志・亀田美保『テーマ別中級から学ぶ日本語 三訂版』研究社

の第1課「なぞなぞ」の第1段落。

=====ここから=====

子供が小学校で英語の勉強を始めた。私は、英語が話せるようになってくれるといいなと思ったり、難しく、きらいになったらこまるなど心配したりしていた。それでも、親が口を出して、子供にいやがられてはいけないと思って、「今日は何を勉強したの」と尋ねられないでいた。(p.2)

=====ここまで=====

試しに、この部分だけの指導項目を洗い出してみたら、文字数にして、本コーナー4回分ほどの分量になりました（笑）

もちろん授業枠があるわけですから、そのすべてを授業で扱うわけにはいきません。ですが、まずは考えられる指導項目を洗い出すということが必要で、そのあとで、取捨選択をするわけです。そこで今回は、その洗い出し作業を前後半の2回に分けてご紹介しようと思います。

では早速(^\_^)

まず「子供が小学校で英語の勉強を始めた」とありますね。

最初の「子供」というのは他人の子どもか自分の子どもかということになるわけです。それは後の文章を読めばこれが筆者の子どもだということが分かるわけですよね。

次に「小学校で英語の勉強を始めた」とあります。

そうするとまずここで学習者に「君たちはいつから英語の勉強を始めましたか」という話をしてもいいわけですが、日本は平成20年、21年に学習指導要領が改訂され、小学校の授業に「外国語活動」というのが入りました。その結果、5・6年生時で英語を勉強することになったと。

そうすると、ここの「子供」というのは「勉強を始めた」とありますから、新5年生である、ということがわかるわけです。

次に「私は英語が話せるようになってくれるといいなと思ったり、難しくて嫌いになったら困るなと心配したりしていた」とあります。

ここで「英語が話せるようになって」の「英語が話せる」のはだれかということですね。これは「私」ではなく「子供」だということです。主語が書かれていませんが、それだけにしっかり確認しておく必要があります。

それから、「なってくれるといいな」とありますね。

これは「話せるようになるといいな」ではなく「なってくれるといいな」と書いてある。つまり、なぜここで「くれる」を入れているかということなんですね。これは、「くれる」という動作の授受は、それによって恩恵が移動するということを示しています。つまり、子どもが英語を勉強して話せるようになったら、自分も親としてとてもうれしくなるという気持ちがこの「てくれる」にこめられているわけですね。

「難しくて嫌いになったら困る」の「難しい」というのは子供にとって英語の勉強が難しいということ。「嫌いになったら困る」の「嫌いになる」も子どもが英語をとということ。で、「困るな」という部分の「困る」のは私、つまり筆者です。

このあたり、主語や目的語が省略されてますので、しっかり学習者とインタラクションしながら確認する必要があります。

さらに、「困るな」の「な」は何かということも要確認です。

初級が終わって中級に入ったばかりの学習者の場合、場合によっては動詞の後の「な」を禁止の「な」と誤解するかもしれません。したがってこの「困るな」は禁止ではなくていわゆる詠嘆の「な」であると押さえる必要があります。

さらにさらに、「心配したりしていた」とあります。

「心配したりした」ではなくて「心配したりしていた」と「ていた」の形を使っているわけです。これななぜか。

「ていた」を使うということは、一定期間この動作が行われていたということを表しています。

じゃ、いつからか。

それはその前の「子どもが小学校で英語の勉強を始めた」の「始めた」というのが大きなヒントになります。

つまり、子どもが英語の勉強を始めるまえから親である筆者はいろいろと心配していた、そして今も心配しているということなんです。

とにかく、心配しまくっているわけです。

ではなぜ、筆者はこんなに子どもが英語の勉強を始めるのをいろいろと心配しているのか。

ふう。。。。

続きは、次回。

## 6. 指導項目を徹底的に洗い出せ（後半）

前回の続き。

松田浩志・亀田美保『テーマ別中級から学ぶ日本語 三訂版』研究社

の第1課「なぞなぞ」の第1段落を吟味中。ひとまず本文を再掲しますね。

=====ここから=====

子供が小学校で英語の勉強を始めた。私は、英語が話せるようになってくれるといいなと思ったり、難しく、きらいになったらこまるなど心配したりしていた。それでも、親が口を出して、子供にいやがられてはいけないと思って、「今日は何を勉強したの」と尋ねられないでいた。(p.2)

=====ここまで=====

ではなぜ、筆者はこんなに子どもが英語の勉強を始めるのをいろいろと心配しているのか。

いろいろ理由はあると思いますが、何より大きいのは、筆者自身が小学校で英語の勉強をした経験がないということ。

自分が経験したことのないことを子どもがこれから経験しようとしているわけですね。

だから筆者自身もこれからどうなるのか想像できない部分も非常に多い、だからいろいろと心配しているということなんですね。

また、大多数の日本人は中学・高校で英語を勉強してきたにもかかわらず、英語によるコミュニケーションが苦手。

そういうことも関係しているのかもしれない。(ちなみに私も大の苦手ですわ。苦笑。)

この辺も学習者とインタラクションをしながら探っていけるといいかなと思います。

本文行きましょう。

「それでも親が口を出して子供に嫌がられてはいけないと 思って」います。

「それでも」、というのはここでは「でも」ですね。いろいろ心配していろいろ聞きたい、でも、ということです。

「親が口を出して」の「口を出す」というのは意見を言ったり、文句をいったりするという意味です。

具体的にここではどういうことかという、子供の勉強方法についていろいろ意見を言ったり、そんな勉強方法ではだめというふうに文句をいったりしてしまう、ということですね。つい言ってしまうということですね。

この時に授業の流れの中で「つい」とか「思わず」とかの言葉の復習を入れてもいいかもしれません。

「子供に嫌がられてはいけない」は「子どもが親を嫌がる」で主語が親になるから受身の「嫌がられる」ということですね。

ここまででたとえば前回扱った「ていた」とかのアスペクトや「てくれる」といった授受表現、そして、今回の「嫌がられる」のような受け身。

これらは初級で勉強する文法項目なんですけど、実際に使いこなせるかどうかというのはなかなか難しいんですね。

こういった文法項目を使いこなせるかどうかが中級レベルの日本語能力があるかどうかの試金石になりますので文章中にこういう表現が出てきた場合にはしっかり押さえておきたいと思います。

「子供に嫌がられてはいけないと思って今日は何を勉強したの、と尋ねられないでいた。」

「今日は何を勉強したの」このときの「勉強したの」はどういう意味の文かということですね。

「勉強しましたか」だったら学習者はすぐこれは疑問文だとわかると思います。

でも「今日は何を勉強したの」という疑問文の形はもしかしたら学習者は知らないかもしれ

ません。

したがって「～の」というのが疑問文であるということは押さえる必要があるでしょう。

しかもこれは目上の方が目下の人に優しく尋ねる時の言い方であるということも押さえておきたいですね。

次の「尋ねられないでいた」は「尋ねることができないでいた」「尋ねられなかった」ということですね。

「尋ねられないままでいた」ということですね。

このときは「なくて」ではなくて「ないで」を使うということも押さえておくといいでしょう。

ということは筆者は本当は「今日は英語で何を勉強したの」といろいろ子どもに聞きたくてしかたがないんですね。

しかたがないんだけどもいろいろ聞くと子どもに嫌がられそう。だからぐっと我慢しているというのが、この短い文の中でよくわかるわけです。

そうやって、親というものは何かにつけ、子どもについて心配ばかりしているわけです。

以上、ざっと取り上げられるだけの指導項目を洗い出してみました。

もちろん、これはあくまでも私の視点・解釈であって他の方だとまた違う項目もあるでしょう。

文章の内容を大きく逸脱しない限り、それはそれでアリだと思います。

また、これらすべてを授業で扱うかどうかは学習者の反応や授業時間の枠などとも関係します。

ただ、少なくとも精読授業というのは、語彙や表現、表面的な内容の確認だけではない、情報収集だけが目的ではない、ということがお分かりいただけましたでしょうか。

しかし、授業の準備はこれだけではありません。

これをそのまま授業で出しても、教師の調べもの発表会にしかありません。

ですので、ここでさらに指導項目を学習者とどう問答しながら提示していくか、

そして、学習者に「なるほど！そういうことだったのか！」と思わせめるよう、どう演出するかを考える必要があります。

続きは、次回に。

## 7. 精読授業の要諦は、「質問」と「共感」。

シリーズでお届けしている「精読指導の秘奥義」。今回は第7回。

まずは、本文を再掲。

松田浩志・亀田美保『テーマ別中級から学ぶ日本語 三訂版』研究社

の第1課「なぞなぞ」の第1段落。

=====ここから=====

子供が小学校で英語の勉強を始めた。私は、英語が話せるようになってくれるといいなと思ったり、難しく、きらいになったらこまるなど心配したりしていた。それでも、親が口を出して、子供にいやがられてはいけないと思って、「今日は何を勉強したの」と尋ねられないでいた。(p.2)

=====ここまで=====

授業で洗い出した指導項目を、そのまま授業で学習者に提示しても、どうしてそれが、単なる教師の調べもの発表会にすぎないのか。

そもそも、「教師の調べもの発表会」的な授業ではダメなのか。

結論から言うと、ダメです(笑)

文法や語彙といった「言語知識」に関わるものであれば、ある程度、教師から教えることも必要ですが、読解や聴解といった「言語技能」に関わるものの場合、学習者に身につけさせるべきは、スキル。

これは、実際にそれをさせなければ身につけません。

精読授業に限らずどの授業でも大事なことです。とりわけ精読授業で教師が意識すべきことは、「授業の目的は、答えを教えることではなく、答えを導くための思考経路を学習者の脳内に作ること。」ということ。

「ある人に魚を一匹与えれば、その人は一日食える。 魚の取り方を教えれば、その人は一生を通して食える。」

と老子先生もおっしゃいましたが、まさに、「一生を通して食える」スキルを身につけさせることが、精読授業の要諦なわけです。

イメージとしては、教師が目標までの見えないレールをしいてやり、そこに学習者を載せて、後ろから押してやる感じです。

後ろから押しながら、学習者自身の力で前進するように促してあげながら、脱輪しそうになったら、ちょちょっと修正してあげる。

そして、少しずつ後ろから押す力を弱めてやって、最終的には手を放しても大丈夫なところまで持っていくと。

私の中ではそんなイメージです。

では、具体的にどのようにして授業の中で学習者を導いていけばいいのか。

基本的な学習者とのインタラクションのスタイルは、「質問」と「共感」です。

「この『これ』は、何ですか。」

「この文の主語は、何ですか。」

といった言語的なものから、

「どうして筆者は、こんなに心配しているんですか。」

「どうして筆者は、口を出さないんですか。」

といった内容把握に関するもの、さらに、

「この母親をどう思いますか。」

「自分がこの母親だったら、どう思いますか。」

といった意見を聞くものまで。

質問という形で、学習者に考えさせる機会をどんどん与えます。

その際に、大事なことは

1. 学習者にとってわかりやすい質問文であること。
2. 学習者が考えれば答えられるレベルの内容であること。

です。

変にまどろっこしい質問だと、その意味を理解するのに苦労します。

また、いきなり難しい質問を浴びせても、学習者は答えられません。

ですので、質問の設定のコツは、実際にいるクラスの学習者の具体的な誰かを思い浮かべながら、

「この学習者なら、この質問に答えられるだろう。」

「この質問なら、きっとあの学習者が食いついてくるに違いない。」

と想像（＝妄想。笑）しながら考えることです。

そうすると、より適切な質問を設定することができます。

また、自分ではやさしい質問と思っていても、学習者にとっては、意外と難しかった、ということもあります。

その場合は、さらにわかりやすい形で質問をすることも必要です。

そして、授業準備でもう1つ大事なことは、

「教師の質問に、学習者が的外れな答えを言ったときの切り返しの仕方や突っ込みを考えておく。」

というところです。

例えば、「『英語が話せる』の主語は誰ですか。」という質問に、学習者が「『私』。」と答えた

とすると、

「お母さんが英語が話せるようになるんですか。誰が英語を勉強するんですか。」

と突っ込む。

そうして、再度学習者に考えさせるわけですね。

こうして「質問」で学習者の思考力をどんどん延ばしていくわけです。

ただ、質問攻めの授業というのも窮屈なもの。それだけの授業だと、まるで取調室の誘導尋問（笑）

なので、「共感」の要素も授業に入れ込むと。

例えば、学習者が何か意見を言ったときに、「なるほど、それはいいですねえ。」とか、「確かに、そういう考え方もありますね。」あるいは、ダイレクトに、「その意見、私も賛成です。」と言ってもいいでしょう。

もちろん、学習者の意見に軽く反論したり、「もう少し詳しく話してみて。」とさらなる説明を求めたりするのもあります。

こうして、学習者とどんどんインタラクションをとりながら、文章を深く、より深く理解しつつ、教師と学習者、あるいは学習者同士のより深い相互理解も促していくわけですね。

ただ、最初のレールの話ではありませんが、電車に乗っている時というのは、走っている方向だけを見ているわけではありませんよね。

時に窓の外の風景を見たりして、心動かされることもあるわけです。

今回は、そのあたりについて話しましょう。

## 8. 脱線による偶発学習こそ精読授業の醍醐味。

シリーズでお届けしている「精読指導の秘奥義」。今回は第8回。

一気にしゃべっていたら、あっという間に8回目。あまり引っ張るのも何なので、ひとまず今回で閉めようと思います。

ただ、精読授業については、まだまだお伝えできることがたくさんあって、おそらく、個別の教材の文章を見ていったら、

「あっ、これも伝えなきゃ。」

「あっ、この教材は、ここが肝なんだよね。」

というのがいくらでも出てきます。

しかも、秘中の秘をお伝えしようとするほど、文面だけでお伝えするのは不可能。やはり「場の雰囲気」的なものを感じ取っていただく必要があります。

やはりこれは一度「精読指導の秘奥義！セミナー」なる「同じ問題意識を持つ者が集う学びの場」を設定たほうがよさそうですね。早速検討しようと思います。

で、今回は、「脱線による偶発学習こそ精読授業の醍醐味。」

今回は、具体的なスキル云々よりも、「授業での「脱線」が学習者にとっては実は大きな学びの機会になるという事実。」をお伝えしようと思います。

というのも、特に経験の浅い日本語教師の方や、ある種几帳面な先生の中には、本来の授業進度から逸脱する脱線を無駄なものとして極力避けようとする方がいらっしゃるからです。

もちろん、脱線することで指導すべき内容がすっ飛んでしまっただけでは本末転倒ですが、そうでない程度であれば、むしろ脱線を生かさないのはもったいない。

実際、皆さんが小中高で印象に残っている授業というのはだいたい先生が脱線したときの話ではないでしょうか。

そこそこ昔のことを、今まで覚えているというだけでその威力のほどが分かりますよね。

では、なぜ覚えているのでしょうか。

答えは単純。

脱線したときの話のほうが指導内容より面白いからです。（たまに滑るときもありますけどね。笑。）

脱線したときの話には、往々にして笑いがあるからです。（笑って、とっても大事な要素です。）

脱線したとき話のほうが教師の本音が出るからです。

教師が本音を言うと、それにつられて学習者も思わず本音を漏らしてしまう。

そうすると、そこに本音ベースの真のコミュニケーションが生まれると。

そして、話題があっち行ったりこっち行ったりしながらその時々学習者は「あっ！そうなんだ！」とか、「なるほど、そういうことだったのか、」と、いろいろ発見的に学ぶわけです。

そうした偶発学習が実は精読授業の醍醐味だったりするわけですね。

こうした授業を展開するために必要なことは、

「しっかり授業準備した後は、一旦それを突き放し、それにとらわれすぎないようにすること。」

です。

この辺りは、やはりある程度場数を踏むことも必要です。

参考に見てみてくださいね。

## おわりに

いかがでしたでしょうか。精読活動のコツ、そしてその魅力が伝わりましたでしょうか。

私自身、この原稿を書きながら、かつて教えた学習者の何かに気づいた顔、驚いた顔、何かを発見した顔、感動した顔をたくさん思い出しました。そして改めて「精読活動は面白い」と再認識しました。

精読活動から得た学習者との真のインタラクションの数々は、私にとってとても大切な宝物です。

皆さんも、日本語教育を通じて「心の宝物」をたくさん増やしていただきたいと思います。

最後になりましたが、本コンテンツを作るきっかけをいただいた株式会社アイ・コミュニケーションの平野友朗様に厚くお礼申し上げます。

本コンテンツを最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。